［共同研究］

平成の加賀獅子、その提案と制作

A Proposal and Completion of the ‘Kagajishi’ in the Heisei Era

中川　　衛　NAKAGAWA Mamoru
佐藤　俊介　SATO Shunsuke
石田　陽介　ISHIDA Yohsuke
浅野　　隆　ASANO Takashi
高橋　明彦　TAKAHASHI Akihiko
大野　　悠　OHNO Yu

１. 趣旨

平成 20 年度（2008 年）から４ヶ年継続で、「伝統行事等地域交流研究事業・平成の加賀獅子制作」と題する事業を行っている。

事業の趣旨は、金沢美術工芸大学の学生・教員が一丸となって創造力と技術を結集し、新しい加賀獅子を制作すること、および、それを用いて各種イベントに参加して地域振興を図ることである。

そもそも、加賀地方の獅子舞は藩政期以来の長い伝統を有しており、各村の祭の折には豊漁・豊作・豊年を祝いまたは謝し、村々家々の弥栄を祈って舞われたものであった。村ごとに獅子頭が保有され大切に管理されてきた。それは地域の人びとの助け合いと結び付きの精神の反映でもあったが、近年では地域人口の高齢化や職業の多様化などの影響によって若い人びとの参加が少なくなってきた。その結果、祭に獅子舞を出せる町内が激減しているのが残念ながら現状である。

金沢美大は、加賀獅子についての新たな提案を行い、地域の振興に役立て、かつ貴重な伝統的郷土芸能の復活の一助とし、それを後世へと継承させることを願うものである。

以下、４ヵ年に渡る本事業の経過と成果を報告するものである。

２. 金沢市八田の獅子舞

初年度である平成 20 年度（2008）には、まず、加賀獅子の歴史資料の収集、遺蔵されている獅子頭、蚊帳、小道具などの調査を行った。特に、中川教授は、本学の横川善正教授（一般教育・英国文芸史）が生まれ育った金沢市八田町の獅子舞を横川氏とともに尋ね、聞き取り調査を行った。金沢市八田の獅子舞については『ふるさと八田－今昔－』（平成一七年、八田町会発行、一六一頁）に次のような記載があり、参考になる。資料としてこれを引用しておく。

八田の獅子舞

八田の獅子舞は、加賀獅子舞のなかでは近隣の木越町の獅子舞と同じく喧嘩獅子に分類される。巨大な蚊帳の胴体からなる獅子に向かって、賑やかな囃方にはやされた棒振りが、果敢に挑み、切りつけ、最後に「キッタゾーイ」という合図で、暴れ獅子が討ちとられ、舞を終える。現在使われている獅子頭は、昭和五十七年に新調されたものであるが、それまでの獅子頭と同様、口の中は赤く塗られている。胴体は、新旧とも、唐獅子と牡丹の花模様を染め出した麻布でできており、孟宗の割り竹（胴竹）の上にかぶせたもので、これを蚊帳（かや）という。尾竹は長さ二メートル、その先端からは一・五メートルの

［キーワード］石川金沢の獅子舞

赤く染めた麻帯が垂らしてある。

蚊帳のなかには、胴張りを支えたり、尾を持ったりするものが五人と、囃方として若い準倶楽部員（高校生や中学生）が一〇人ほどこれにあたり、笛、太鼓、鉦、それに昭和四十年代初めまでは金沢から三味線をひく芸者が三、四人加わるなど（平成十一年からは北村和雄氏の指導により女子高校生が出演している）、かなりの大所帯となる。胴竹と呼ばれる人足四人を、昭和二、三十年頃には他所から雇っていたが、現在は獅子を出す会の若者の父兄がこれにあたっている。

獅子の頭をもつものは「カッサ持ち」と呼ばれ、倶楽部員がひととおり全員でこれにあたる。赤地に白で八田の八の字を縫付けた懸帯前垂（きんたいまえだ）れ、白足袋にしぼりのはちまきといういでたちで臨む。はやし方の曲目は「ノーエ節」が演奏され、行進中はみなで「オッピキタイサンドーエ、シーシモサイサン、サッショーカイヤラ、オッピキタイサンドーエ」と唄いながら練り歩く。

棒振りは、加賀獅子舞では「棒使い」とも呼ぶが、武術の「棒術」の技を取り入れたものである。棒振りの小道具（得物）には棒をはじめ、太刀、槍、薙刀、竹刀、ほかに鎌などあり、袴・刺し子じゅばん、たすき、白足袋といった凛凛しい姿で、「シャンガン」（赤熊冠）という長い毛のついた冠をかむり、獅子と戦う。八田の棒振りの流儀は浅野川以北にかけて流行した土方丈五郎による「土方流」に習ったものである。棒振りの役は普通小学生がつとめるのだが、獅子も棒ふりも、それぞれの流儀を習うために、祭の半月ほど前から、村の長老や保存会の者に習って、毎晩練習を重ねて、本番に備える。

八田の獅子頭について

現存する獅子頭は二つであり、古いものを古獅子、新しいものを新獅子といっており、特に名称はない。古獅子の材質は桐の白木で、高さ三〇センチ、角の高さ二一センチ、前幅三八センチ、後幅五四センチである。制作年代、作者などについては不詳である。だがこれにまつわる傳庄が二つある。一つは明治中期に木越（現・金沢市木越町）から譲ってもらったというものであり、もうひとつは、北海道へ移住した人々が、この獅子頭を借りて北海道で演舞したことがあり、その際、歯に銀をはめ、懸帯（紅色のラシャ生地で作られた）を添えて返還、寄贈されたというものである。

新しいものは、昭和五十八年に、八田軍人恩給受給者会が寄贈したものである。材質は桐の白木で、高さ二八センチ、角の高さ二一糎、前幅三一センチ、後幅四五センチである。作者は知田晴雲である。新旧二体はともに須々幾神社に保管されている。秋の祭日には獅子の演舞がおこなわれるのだが、「頭持ち」「蚊帳」「棒振り」「囃子」などが、それぞれ自分の担当する役目を果しながら、同時に全体の調和を保たねばならない。その意味では伝統文化の総合芸術といえよう。

演舞の特徴

八田の獅子舞は頭振りに特徴があり、それは上段、中段、下段の型からなる。上段は頭上高く獅子頭を掲げたかたちで始まり、中段はそんきょの姿勢で頭を振る。つまり、他所でみられるような両足を立て、片足を大きく上げる所作は八田の獅子舞にはなく、また下段の構えになると地面に尻を下ろして棒振りと向き合う。最後は、他所の舞では獅子が頭を地に着け沈みこむのだが、八田のそれは空にむかって大きく口を開けて死に体となる。

棒振りの流派は不明だが、以下のような名称がある。しきり、石突き、千鳥、三方、六方、上・下段、鎖鎌、なぎなた、粗太刀、相棒、太刀なぎなた、切り刀の一二種類である。

獅子舞保存会が毎年の行事の決定や段取り、百万石祭への出演などの活動の中心となっている。昭和四十七年には旧ソ連のイルクーツク市への訪問、平成五年には高岡市で遠征実演を

行った。

獅子頭と巨大な蚊帳、そしてこれを操る者、またその周りで演舞する者など、加賀獅子の全体像がよく分かる記述となっている。

３. 年度ごとの制作経過

以下、平成 20 年からの年度ごとの制作経過を記しておこう。

20 年には、先述の調査の他、石田教授、浅野教授、佐藤准教授が協力して加賀獅子のコンセプト・ストーリーの検討とイメージ（ラフスケッチ）に取りかかった。テーマとして「現在、遊び、学び。未来にむかって社会に貢献する」が採用された。そして、「現在」と「未来」と表現するために、巨大な蚊帳を持つ双頭の加賀獅子とすることとした。【図１】全体のアイディア・スケッチ。

平成 21 年度（2009）は、双頭の獅子頭の具体的な設計、およびその制作についやされた。【図２】双頭の獅子。

現在型と未来型と二つの獅子頭は、まず現在型（図版左）が、伝統的な獅子頭をもとに左右非対象でユーモラスな表情を浮かべた造形にしている。ついで、未来型は金属的で直線的な造形とした。また、獅子でなく明らかにこれは龍または蛇であるが、後掲のコンセプト・ストーリーに記したように、これには意味がある。

一応の完成を見て新聞等に公開されたのが平成 22 年度（2010）である。現在型の獅子頭は、この後も丁寧な彩色が施されていった。【図３】彩色をしている学生。

かくのごとく、われわれの加賀獅子の全体像のイメージが固まった。【図４】加賀獅子の全体イメージ。

暮れも押し詰まった同年 12 月 27 日に、本学本館エントランスにて、蚊帳を初めて組み立てた。【図５】本学エントランスでの蚊帳の組み立て。

また、この時までに獅子頭の改良（目が電飾で光るなど）も行っている。

この頃までに、佐藤准教授が書いたコンセプト・ストーリーを、高橋教授も加わってこれを完成させた（後掲）。

23 年度（2011）は、これまでの成果の積み重ねを大々的に発表すべく、一般公開に向けて歩みを進めた年である。

まず、同年５月 19 日には、本学体育館において、蚊帳の移動方法に関する最終調整を行った。【図６】蚊帳の現在型面。【図７】蚊帳の未来型面。

蚊帳の骨組み（脚立、鉄パイプ、塩ビパイプを組み合わせた）を簡易リアカー２台の上に載せる方式により、移動方法を確立した。【図８】脚立ごと２台の簡易リアカーに載せる。

骨組みは十分に軽量化されており、また簡易リアカーとの固定も安全性を確保するように努めている。簡易リアカー２台は人力でこれを引くが、この２台同士は固定していない。そのため、蚊帳は芋虫のように自在に伸縮しながら移動するというユーモラスな視覚効果をもたらすはずである。

また、蚊帳の構築および解体の手順も工夫し、短時間でこれを行えるようにした。これにより、巨大な蚊帳ではあるが、およそ６人で 30 分程度で組み立てることが可能となっている。

ついで、５月 26 日には、蚊帳の内部に音響機器と電飾を設置し、組み立てを行った。音楽は、佐藤准教授が作曲したオリジナルの電子音楽曲である。他方、電飾はケーブル式の有機ＥＬワイヤーチューブを用いた。特殊な機器によりコンピュータ制御されていて、音楽に合わせて獅子頭の目や蚊帳の電飾が光るようになっている。【図９】

また、この日は、一般公開に先立って新聞等マスコミへの公開を行った。北国新聞、北陸中日新聞が５月 27 日付けの紙面でこれをとりあげてくれた。

ついで、６月４日、５日、金沢市の百万石祭にさいして、金沢城三の丸広場の展示ブースにおいて、これらが初めて一般公開された。【図 10】

４. 演舞者の衣装、小道具のデザインと制作

演舞者とは、獅子と戦う者たちである。がんらい獅子は悪の象徴であり、悪たる獅子の退治こそが獅子舞の本旨であった。ただし、コンセプト・ストーリー（後掲）にも記したようにわれわれのオリジナルストーリーでは、善悪未分の複雑な現代社会を鑑み、「悪とは何か」というそもそもの問いかけを根底に持っている。ゆえに、演舞者と獅子との戦いも、遊戯的なものと捉えている。

衣装の写真【図 11】展開図。【図 12】モデルは浅野教授。

衣装は、加賀の獅子舞の伝統的な装束を参考にしつつ、これにアレンジを加えたものとした。

双頭の獅子頭はそれぞれ「現在」と「未来」と意味していた。蚊帳も同じくそれに合せて２側面を一体化させたものであった。衣装もこれらを踏襲するかたちで、色彩や文様を前面と背面とで分け、コントラストを強調している。前面は金色と銀色を基調に未来を表す機械的なデザインを施し、背面は黒色を基調に現在を表現している。形態（フォルム）は、加賀獅子の伝統装束である法被をベースとしつつ、「卒業して出世した美大生」というコンセプトから、西洋的な正装としての燕尾服をイメージした襟と後尾部とした。また、和式の正装として紋付きもイメージし、両胸部および背面上部には美大の校章（美の字をデザイン化したもので通称ゲジゲジ）をあしらっている。

ついで、加賀獅子の伝統衣装にならって、前掛けを付けている。加えて、頭にはシャンガンと呼ばれる被り物をかぶる。歌舞伎などで用いられる赤熊（しゃぐま）のことで、シャンガンとはその方言である。

以上の衣装については、浅野教授・佐藤准教授の基本デザインのもと、それを大野講師が実際の衣装へと組み立てていった。

この他、演舞者が手に持つ小道具を 10 点ほど作った。いずれも武器ではあるが、遊具・玩具的なものになるよう、電飾などが施されている。石田教授の指導のもと、彫刻専攻の学生がこれにあたり、ユニークな小道具が制作された。

5. 担当教員

研究代表者（総括）	中川　衛・教授（工芸）
獅子頭デザイン	佐藤俊介・准教授（日本画）
	石田陽介・教授（彫刻）
	浅野　隆・教授（製品デザイン）
蚊帳デザイン	佐藤俊介
	浅野　隆
衣装デザイン	佐藤俊介
	大野　悠・講師（ファッションデザイン）
小道具デザイン	佐藤俊介
	石田陽介
ストーリー	佐藤俊介
	高橋明彦・教授（一般教育等）
音楽	佐藤俊介
機械・電気	佐藤俊介
資料調査	中川　衛
	横川善正・教授（一般教育等）

6. コンセプト・ストーリー

□コンセプト

「現在、遊び、学び。未来にむかって社会に貢献する」

獅子舞は予祝的なものであり、《悪たる獅子を退治する》というものである。ならば、つまり獅子は悪である。

そうではなく、「ユーモア」や「遊戯」をテーマに展開し、物事の平和的な解決をアピールしたい。

そのためには、《悪》とは何かという問いかけを根底的なコンセプトとする必要がある。他者をたんじゅんに悪と決めつけてはいけない。そもそも、悪は生命体にとって根源的なあり方でもある。不確実性としての生命は、生態系の調和を乱す存在なのだから。非生物の世界が調和であるなら、生物の世界

は闘争の歴史でさえある。そして、悪を乗り越えるのは、退治・排除でなく、他者との広い共感と寛容によってのみ可能となるのだ。その意味では、善と悪とは、一つの身体における二つの表現にほかならない。

悪の象徴たる獅子をきっかけに、このことを表現する。

□パフォーマンス

演者は、本学の専攻数に比例して９名とする。９は、３（舞の曲数）の２乗（つがいのライオン）であり、無限を象徴する秘数である。

演者が所持する小道具は、武器ではない。小道具のほか、演者の衣裳、獅子頭・蚊帳、これらはいずれも伝統的な意匠を踏襲しつつ、現在と未来を表現することをデザインコンセプトとする。

□ストーリー

201X年、加賀地方各所に突如出現し始めた正体不明の獣（じゅう）。その正体を知るためには、十数年の時をさかのぼらねばならない。

◇世紀末編

1999年５月20日、卯辰山の金沢動物園は辰口（たつのくち）の県立いしかわ動物園への移転は大詰めを迎えていた。それは30㎞にも及ぶ距離の大移動であり、裏では密かに「種の大移動」と名付けられていた。その背景には、地名から知られるとおり、龍にまつわる背景を持っていたのである。

しかしその時、脱走したつがいの仔ライオンがいた。新動物園への県民の大きな期待が膨らむ中、脱走という不祥事は県幹部と園関係者によって一切を抹殺された。事件当時密かに出動した県警機動隊の特別精鋭秘密小部隊が、その夜間捜査中に動物園近くの斜面茂みでカモシカとは思えない程大きな動物を射殺し斜面下の浅野川に落ちたとされる報告や、その事実を知らない近隣住民の「得体の知れない獣の体毛のようなものが川に大量に流れて来た」との通報もあいまって、すべては闇の中へ葬られた。しかし、じっさい隊員が撃った動物は、娯楽施設たる金沢ヘルスセンター時代で使用された子ども怪獣ショーの着ぐるみが廃棄されたものであり、近隣住民の通報の「体毛」もその人工毛であったのだ。

しかしながら、前述の部隊が発射した散弾は、実はつがいの仔ライオンにも命中しており、致命傷となりかねない大きなダメージを与えていた。山側環状線鈴見隧道付近の工事現場（当時）でぐったりしていたところを、数名の若者に保護される。この若者たちこそ、大声を出せば聞こえる距離に位置する金沢美術工芸大学の学生たちだった。彼らは初のグループ展の打ち上げの続きを川原で行うべく、たむろ場所を求めて浅野川かいわいを徘徊していたのだった。二頭の仔ライオンはそれぞれ「カーナ」と「ビー」と名付けられ、彼らが無償同然で借りていた金沢町家の共同アトリエで手厚い保護を受けることになる。一人が某国立大学の獣医コースから再受験した学生だったこともあり、カーナとビィーは順調に回復し、学生たちにもなつき、驚くべきことに、学生たちは二頭を散歩へと連れ出せるまでになった。もちろんそのままの姿では無理だと判断し、彼らの手でデザイン・制作された着ぐるみや変装用意のパーツなどを装着した上でのことである。【１、遊戯の舞】

彼らの交流はそれぞれを大きく成長させた。学生たちはそのことで各々の表現の幅と奥行きを大きく広げたし、二頭のライオンの知能と肉体は、野生とはまた違った意味で大きく成長した。それらはもはや「進化」と呼べる程に特異なものであった。二頭のライオンと９人の人間。彼らはどちらが優位に立つわけでもなく戯れる、そういった神出鬼没を繰り返した。そのパフォーマンスは人々を平和な気持ちにさせ魅了した。

◇201X年編

世界は平和であり、地上から「悪」は消え去りつつあった。平和とは、地上から「悪」をあぶり出し、抹殺していくことであった。悪を根絶せよ！　世界はその一色に染まっていた。

９人の美大生たちもそれぞれ自分の活躍の場を持っていたが、地上の最後の悪として、カーナとビィーが捉えられたというニュースを聞く。彼らは世界善悪審議会のメンバーに選出され、久しぶりに

金沢に集合する。

審議会の説明によれば、カーナとビィーこそ、世界の根源的悪の象徴であり、その末裔であった。それは、歴史・伝説的な悪たる獅子＝龍（オロチ）であり、テーベのスフィンクス、ネメアの谷の獅子、地獄の番犬ケルベロス、インドの獣人ナラシンハ、崑崙山の人面虎身の開明獣。そして、エデンの園の蛇、出雲の八岐大蛇、ヨハネの黙示録の赤い龍、インジェン社のＴレックス。それらはみな根源的に同類であり、その末裔であり、完全態がカーナとビィーだったというのだ。だから、それを退治することで世界に調和と平和が訪れる……、審議会はそう説明する。彼ら９人は、自らの手でカーナとビィーを退治する役目を引き受ける。戦いが始まる。それは見た目の華やかさとはうらはらに、とてつもなくつらいものであった。【２、闘争の舞】

戦いは終盤にさしかかっていた。カーナとビィーは９人に問いかける、「君たちは、わたしらから、何も学ばなかったのか」。９人は、学生の時、助けたはずのカーナとビィーから、逆に多くを教わってきたことを思い出す。

カーナとビィーはさらに問いかける、「悪から学ぶというのはどういうことか」。それは、自らの中にも実は悪の契機が存在していることを自覚することではないのか。彼ら９人は気づく。悪とは、すべて人間のものではなかったか。最も罪深い存在は人間ではなかったか。カーナとビィーは９人に告げる。「君は、私を助けることで、また君たちじしんをも助けることになったのだ。その時に、悪は悪ではなくなるのだ」。【３、寛容の舞】

生命は地球にとって過剰（悪）として生まれるが、生命体同士の関係の中でのみ悪を超えることができるようになる。生命が存在する限り、悪は決して消え去ることはないが、寛容の心、許すことの中でのみ、悪は浄化されうる。

地球上のすべてのものは、科学法則に従って、均衡のとれた調和を実現している。そこに生命体が存在することで、この調和が崩れた。生命とは、偶然と不確実性を生み出すみなもとである。生命の霊長が人間である以上、人間とは調和のとれた地球における不均衡と不確実性の根源なのである。生命は他の生命によって生かされている。生命は己のなかに悪を抱えつつ、他の生命とのつながりのなかでのみ、その悪は浄化されているにすぎない。善悪とは一つの身体の二つの表現であることを知ること。このあやうい均衡を生きること。それが「美」であり、アート（技）である。ここに９人は「美の創造を通して人類（生命体）の平和に貢献する」という金沢美大の建学の理念の意味を知る。そこは、いしかわ動物園（能美市）から鬼門（北東）の方角２２ｋｍ、金沢市小立野の地にある大学である。

７. まとめ

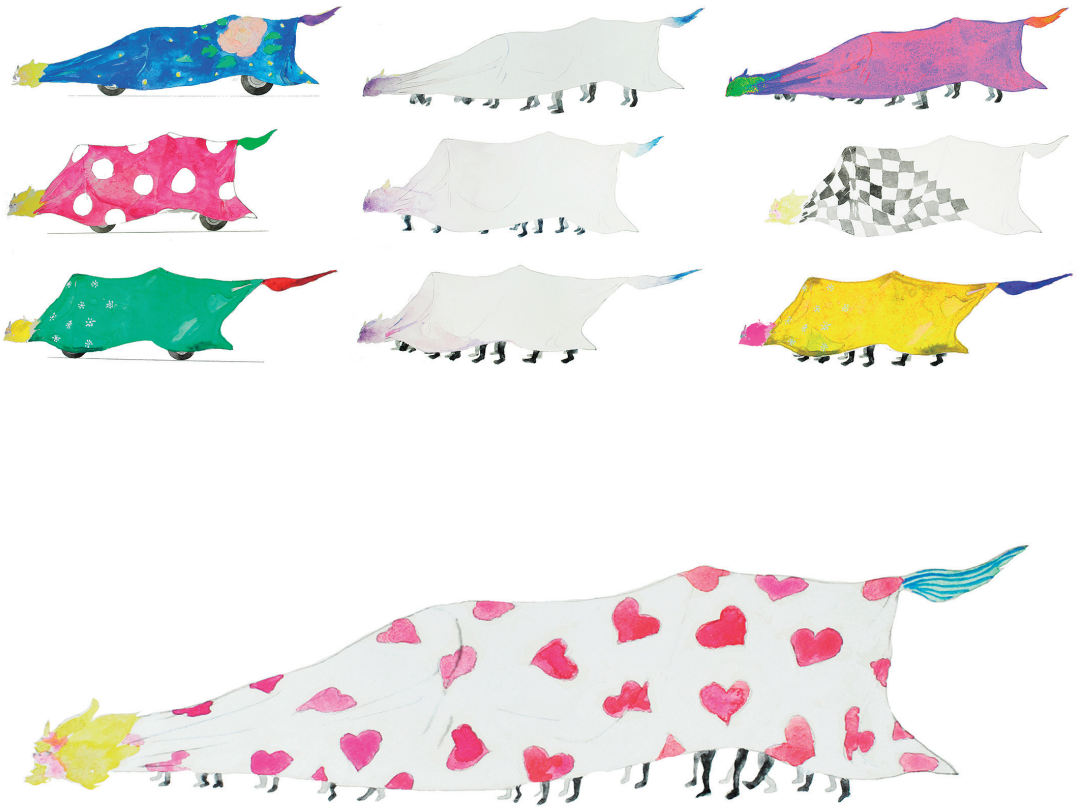
冒頭でも述べたように、本事業の願いは、金沢美術工芸大学の学生・教員が一丸となって創造力と技術を結集し、新しい加賀獅子を制作すること、および、それを用いて各種イベントに参加して地域振興を図ることである。

金沢美大は、加賀獅子の制作と提案を通じて、地域の振興に役立て、かつ貴重な伝統的郷土芸能の復活の一助とし、それを後世へと継承させることを願っている。

これ以後も、引き続き、一般公開の方途を探っていきたいと考えている。

（なかがわ・まもる　工芸／金工）
（さとう・しゅんすけ　日本画）
（いしだ・ようすけ　彫刻）
（あさの・たかし　製品デザイン）
（たかはし・あきひこ　一般教育／日本文学）
（おおの・ゆう　ファッションデザイン）

（2012 年 10 月 31 日　受理）



【図１】全体のアイディア・スケッチ

【図２】双頭の獅子

【図４】加賀獅子の全体イメージ

【図３】彩色をしている学生

【図５】本学エントランスでの蚊帳の組み立て

【図６】蚊帳の現在型面

【図７】蚊帳の未来型面

【図８】脚立ごと２台の簡易リアカーに載せる

【図９】

【図10】

【図12】モデルは浅野教授

【図11】展開図